

「紫」ゆかりの地帰還

文人の
武蔵野

村上春樹の長編小説「スプラウトニクの恋人」は、Kと記される教師が一人称「ぼく」で語る「すみれの物語」です。Kが想いを寄せるすみれがミュウと呼ばれる女性と恋に落ち、性欲の不合から添い遂げることができずに「こちら側」から「あちら側」へ失踪し、Kはすみれを捜し求めます。当時、Kには肉体関係のあ

村上春樹 ⑩



「スプラウトニクの恋人」に登場する井の頭公園（三鷹市で）

る「ガールフレンド」がいました。ガールフレンドには、「にんじん」と呼ばれる小学生の息子がいました。にんじんは万引き事件を起こし、担

任のKが引き取りに行きます。Kはにんじんと向き合い、「ガールフレンド」との関係に努力して清算します。それが「正しいこと」だったかの断定は注意深く留保されますが、事態は好転し、すみれは帰還します。

Kが住むのは国立で、吉祥寺に住むすみれと中央線で繋がっていました。すみれがKと対話する井の頭公園は、Kによって「武蔵野」と名指される場所でした。

ところが武蔵野のすみれは、青山に住むミュウと出会い、吉祥寺からミュウの拠点に近い代々木上原に引っ越します。すみれがミュウに連れ

られて失踪するのはギリシャの島ですが、島の名は記されません。そこは「あちら側」の境でした。立川でにんじんが万引き事件を起こし、すみれは「こちら側」に戻ってきます。

万葉集のすみれは、愛しい人を表象し、性欲を抑制する効果があるとされる紫草と同じ系統の紫色をもちます。すみれという花の名は総称で、觀賞用とも食用とも薬用とも言われ、歌の中では摘まれる対象でありながら摘まれるのを忘れられる存在です。そして「スプラウトニクの恋人」で言及されるモーツァルトの「すみれ」で歌われるゲーテの詩のすみれは、想いを寄せ

る娘に踏みつけられ、それによしとする存在です。

登場人物のすみれは、紫のゆかりの圏域である武蔵野では性欲や愛情を理解することができませんでした。やがて武蔵野から遠ざかり圏外に離れます。しかし、にんじんという子供の力が作用したのでしょうか、武蔵野で待つKのもとに戻ってくるのです。

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）
（敬称略）

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。